

# 社会的事象を公正に判断する力を高める小学校社会科学習指導の工夫 — トゥールミンモデルを活用した授業構成を通して —

呉市立明立小学校 堀江 大志

## 研究の要約

本研究は、社会的事象を公正に判断する力を高める小学校社会科学習指導の工夫を明らかにしようとしたものである。文献研究を通して、社会的事象を公正に判断する力を、社会的事象について多面的、総合的に考えたことを根拠にして判断し、知識を獲得していく力と定義した。また、社会的事象を公正に判断する力を高めるためには、判断によって獲得する知識を明らかにし、児童に自らの考えの根拠をもって判断させるよう授業構成を工夫することが必要であることが分かった。そこで「工業の今と未来」の学習において単元計画、学習過程を工夫し、自らの考えの根拠を整理しやすいトゥールミンモデルを活用した授業を行った。その結果、児童は、社会的事象を多面的、総合的に考え、根拠を明らかにして、知識を獲得することができた。このことから、トゥールミンモデルを活用した授業構成は、社会的事象を公正に判断する力を高める上で有効であることが明らかになった。

**キーワード：社会的事象を公正に判断する力 トゥールミンモデル**

## I 主題設定の理由

中央教育審議会答申（平成20年）社会科、地理歴史科、公民科の改善の基本方針には、社会的事象に関心をもって多面的・多角的に考察し、公正に判断する能力と態度を養うことを一層重視する方向で改善を図ると示された。小学校学習指導要領解説社会編（平成20年）には、「社会的事象を公正に判断するとは、決して一人よがりの判断ではなく、社会的事象を多面的、総合的にとらえ公正に判断することを意味している。」<sup>1)</sup>と述べられている。

社会的事象を判断することに関わって、所属校の児童にアンケートによる実態調査を行った。質問項目及び回答結果は、図1に表した。実施日、対象は次のとおりである。

○ 実施日 平成24年12月10日

○ 対象 所属校第5学年（1学級28人）

回答結果から、28人中21人の児童が、理由を付けて考えを述べるのがあまりできていないと回答しており、多くの児童が、根拠を明らかにして自分の考えを述べることに苦手意識をもっていることが分かる。

根拠を明らかにして考えることについて、国立教育政策研究所の特定の課題に関する調査結果（平成20年）小学校社会によると、実社会・実生活における問題を見出し、その解決策と根拠を問う調査では、

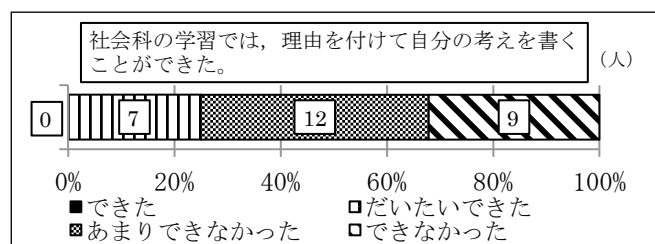


図1 社会的事象を公正に判断する力についての実態調査

解決策の記述は、86.1%の通過率であったが、その根拠を記述することは、67.6%の通過率であった。この結果から、課題の解決策の根拠となる理由を説明することが不十分だとしている<sup>(1)</sup>。これらの原因として、根拠を明らかにして判断し、自分の考えをもつことが、十分に身に付いていないからだと考える。これまでの私の授業を振り返ってみても、学習課題について判断させる手立てが不十分であった。そのため、児童は、多面的に考え、十分な根拠を示さずに判断することが多かった。

そこで、判断を導き出す思考の道筋を、データ、理由付け、主張等の要素で図式化したトゥールミンモデルを活用して授業構成を行う。このことで、小学校段階でも、他の見方考え方との共通点、相違点を踏まえて、根拠を基にした判断ができると考える。以上のことにより、社会的事象を公正に判断する力を高めることができると考え、本主題を設定した。

## Ⅱ 研究の基本的な考え方

### 1 社会的事象を公正に判断する力とは

社会科の授業における判断について、森分孝治（1984）は、「知識は、判断の内容であり、判断した結果である。」<sup>2)</sup>と述べ、社会的事象について判断した結果により、知識を獲得するとしている。社会的事象を判断することについて、北俊夫（2011）は、判断する際は、事実に基づいて、根拠をもち公正に多面的に考える手続きが求められると述べている<sup>2)</sup>。公正に判断することについて、岩田一彦（2001）は、その場の思いつきではない合理的な判断が求められると述べ<sup>3)</sup>、公正に判断するためには、一人よがりではない、多面的な考えが必要としている。

以上のことから、本研究では、社会的事象を公正に判断する力を、社会的事象について多面的、総合的に考えたことを根拠にして判断し、知識を獲得していく力と定義する。

### 2 社会的事象を公正に判断する力を高めるには

#### (1) 判断によって獲得する知識とは

社会科の学習における判断について、尾原康光（1991）は、「社会科授業では、社会事象に対して何らかの判断がなされている。社会事象に対してなされる判断は、その結果として得られる言明の種類によって2つに大別できる。」<sup>3)</sup>と述べており、社会的事象に対してなされる判断は、事実判断と価値判断であるとしている<sup>4)</sup>。

吉村政宣（1985）は、社会的事象を事実判断することによって、事象の事実や意味等を認識できると述べている<sup>5)</sup>。岩田（1991）は、社会的事象を認識することによって得られる知識について、事象の存在について述べた記述的知識、社会事象間の関係を原因と結果の関係で述べた説明的知識、社会事象の因果関係についてより一般化した知識である概念的知識を挙げている<sup>6)</sup>。これらのことから、岩田の挙げた三つの知識は、事実判断によって獲得できる知識と捉えることができる。

価値判断で獲得する知識について、岩田（1991）は、「～なので、～すべき（すべきではない）。」と表される規範的知識と述べている<sup>7)</sup>。また、岩田（2001）は、「社会科では、事実判断に基づいた価値判断のできる子どもの育成を図ってきた。」<sup>4)</sup>と述べている。これらのことから、価値判断で獲得す

る知識は、事実判断に基づき、根拠を明らかにして、解決策等を示すことであると捉える。

ここまで述べてきたことを基に、事実判断、価値判断によって獲得する知識を表1にまとめる。

表1 事実判断と価値判断によって獲得する知識と内容

判断の種類	知識の種類	知識の内容
価値判断	規範的知識	事実判断に基づいて解決策等を示すことができる知識
事実判断	概念的知識	社会事象の因果関係についてより一般化した知識
	説明的知識	社会事象間の関係を原因と結果の関係で述べた知識
	記述的知識	事象の存在について述べた知識

#### (2) 判断する力を高める授業構成とは

朝倉淳（1996）は、判断する力を高める有効な手段として、判断の場面を明確に位置付けた授業構成を設計した。その単元計画は、事実判断で獲得した知識を基にして価値判断ができるよう、事実判断、価値判断の順序で計画されている。また、授業の中では、個人内の判断と他の児童との交流による判断を組み合わせる学習過程を示し、このことにより、自らの判断に確信がもてたり、修正ができたりするとしている<sup>8)</sup>。

桑原敏典（2009）は、価値判断の指導が事実判断の指導終了後に位置付くような単元計画を立てるべきだと述べ、これにより価値判断が、他の価値判断を注入されることのない主体的な価値判断になるとしている<sup>9)</sup>。また、学習過程について、「授業は生徒が自ら事実に基づいて考え、判断し、自分の判断を表現し、さらに、他者の判断を聞いて自らの考えを修正していく過程として組織されると考えられるのである。」<sup>5)</sup>と述べている。

これらのことから、社会的事象を公正に判断する力を高めるには、事実判断の学習の後に価値判断の学習が行えるよう単元計画を工夫すること、個人内の判断と他の児童との交流を基にした判断を取り入れた学習過程を工夫することが有効だと考える。

### 3 トゥールミンモデルを活用した授業構成について

#### (1) トゥールミンモデルとは

足立幸男（1984）は、トゥールミンモデルについて、ステイーブン・トゥールミンが、論理の構造をシンプルに分かりやすく図式化したものであり、主にデータ、主張、理由付けの三つから構成されると述べている。これらを図式化したものが次ページの図2である。

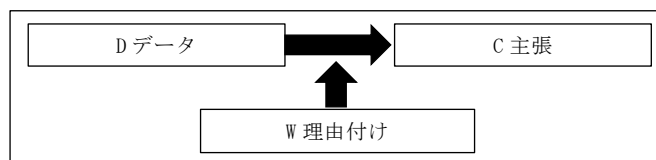


図2 トールミンモデル<sup>(10)</sup>

データには、主張の基になる事実や知識を、理由付けにはデータから主張を導いた理由を記述する。

トールミンモデルのよさとして、足立（1984）は、主張を導く根拠をデータと理由付けに分けて記述することで、理由付けが目に見える形になったことを挙げている<sup>(11)</sup>。トールミンモデルを使い、理由付けが目に見える形にすることで、なぜこの事実からこの主張が許されるのかという自らの判断の根拠を整理でき、他の主張における、判断の根拠も理解しやすくなる。つまり、トールミンモデルを使うことで、主張の根拠を分かりやすく整理することができるのである。

## (2) トールミンモデルを活用した授業構成の有効性について

中学校・高等学校では、社会問題について討論し、価値判断させる実践の中で、トールミンモデルを活用し、考えの根拠を明らかにする例が多く紹介されている。一方、小学校では、判断の根拠を文章で表現することが多く、トールミンモデルを活用して、図式化する実践例は少ない。

田本嘉昭（平成19年）は、小学校において「思考・判断する力を高める社会科学習の指導の工夫—トールミンモデルを取り入れた討論活動を通して—」という研究を行っている。この研究では、討論の授業においてトールミンモデルを活用し、自分の価値判断の根拠を書かせることで、根拠に基づいた話し合いが活発になり、判断する力を高めることができたとしている<sup>(12)</sup>。一方で、単元計画には、討論場面以外でのトールミンモデルの活用は示されておらず、価値判断におけるトールミンモデル活用の有効性は、明らかにしているが、事実判断での有効性は明らかにしていない。トールミンモデルは、根拠を整理することに有効であることから、価値判断の授業だけでなく、事実判断の授業でも判断する力を高めるために活用できると考える。

そこで、本研究ではトールミンモデルを活用した事実判断、価値判断を指導計画に組み入れ、児童が、より根拠を明らかにしながら社会的事象を公正に判断する力を高めていきたいと考えた。

## (3) トールミンモデルを活用した授業構成モデル

以上述べてきたことを踏まえ、トールミンモデルを活用した授業構成モデルを作成し、次ページの図3に示す。このモデルについて以下説明する。

まず、単元計画について述べる。単元計画は、「学習課題の設定」「追究①」「学習課題の再構成」「追究②」で展開する。「追究①」では、トールミンモデルを活用し、事実判断しながら学習課題を考察する。「学習課題の再構成」では、これまでに獲得した知識を再構成し、価値判断に関わる学習課題を設定する。「追究②」では、トールミンモデルを活用し、価値判断しながら新たな学習課題を考察する。

次に、「追究①、②」における学習過程について、小学校社会科第5学年「工業の今と未来」の単元を例に説明する。

「追究①」では、「予想」「1次判断」「2次判断」の流れで学習を展開する。

「予想」では、「工業のさかんな地域は、どのような場所にできるのだろうか。」という1単位時間の学習課題に対し、児童は、「人が多い場所にできる。」等の予想をトールミンモデルの主張の欄に書き込む。

この予想を基に「1次判断」では、資料を基に「大きな道路に近い場所」「海や川に近い場所」等の課題の根拠となる記述的知識を多面的に捉えて、データに記述する。その後、データに記述した複数の記述的知識を関連付けて判断し、工場の立地条件を主張として記述する。さらに、データと主張を繋ぐ理由を記述し、根拠を整理する。

「2次判断」では、「1次判断」で獲得した知識を他の児童と交流する。ここでは、新しい知識や自分とは違う考え方を基に多面的に考え、1次判断を吟味・修正し、再び判断する。このことによって、「工業製品や原料を運びやすいから、工業がさかんな地域は、海や大きな道路の近くにできる。」といった説明的知識や概念的知識を獲得する。

「追究②」の学習過程においても、同様に「予想」「1次判断」「2次判断」を行い、「これからの工業製品は何を目指せばよいのか。」という学習課題に対し、「工業生産の発達によって、環境が悪化している問題点があるので、日本の高い技術力を生かした環境にやさしい工業製品を今後つくっていくべきである。」等の規範的知識を獲得する。

このような授業構成モデルを通して、児童は、多面的、総合的に考えたことを根拠にして、社会的事象を公正に判断する力を高めることができると考える。

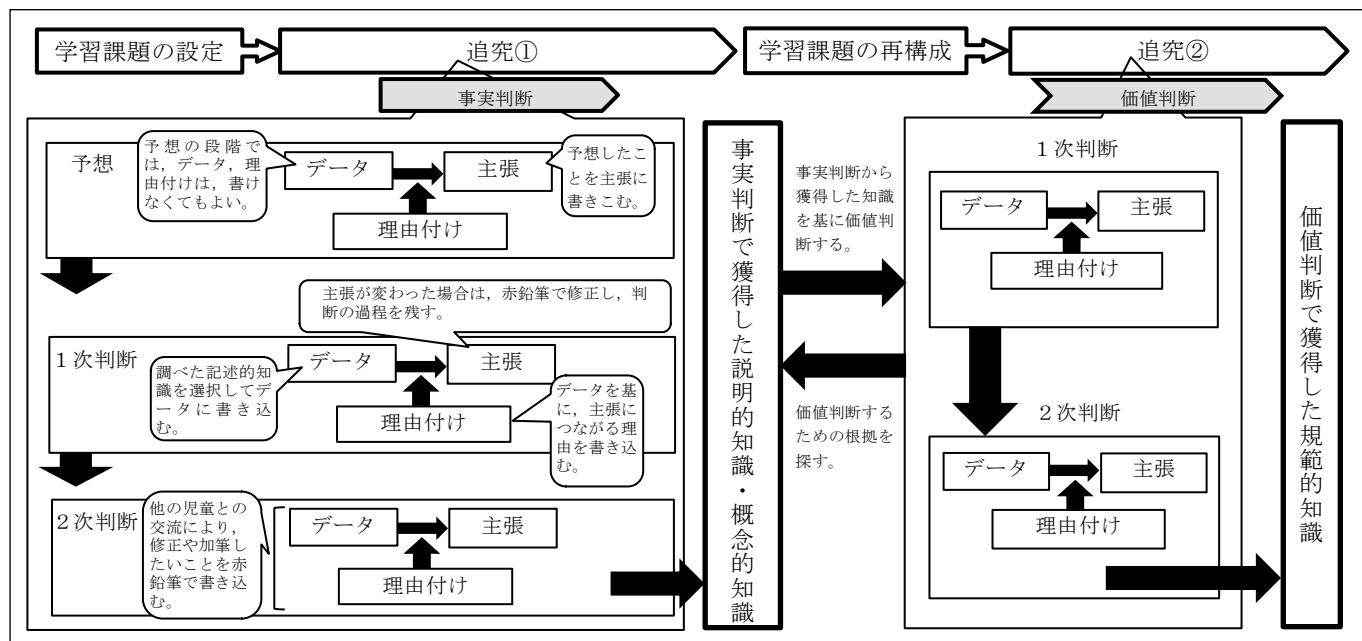


図3 トールミンモデルを活用した授業構成モデル

### Ⅲ 研究の仮説及び検証の視点と方法

#### 1 研究の仮説

小学校社会科の学習において、トールミンモデルを活用した授業構成を行えば、児童は多面的、総合的に考えたことを根拠にして判断し、社会的事象を公正に判断する力を高めることができるであろう。

#### 2 検証の視点と方法

検証の視点と方法を表2に示す。

表2 検証の視点と方法

検証の視点	方法
<p>社会的事象を公正に判断する力を高めることができたか。</p> <p>① 多面的、総合的に考えたことを根拠に事実判断し、知識を獲得することができたか。</p> <p>② 事実判断を基に多面的、総合的に考え、根拠を明らかにして価値判断し、知識を獲得することができたか。</p>	<p>プレテスト ポストテスト</p>
トールミンモデルを活用した授業構成は、社会的事象を公正に判断する力を高める上で有効であったか。	事後アンケート ワークシート

#### 3 プレテスト・ポストテストについて


プレテストでは、水産業を、ポストテストでは、農業を取り上げ、問題を設定した。これらの問題設定理由は、次のとおりである。ポストテストを図4・5に示す。

問1は、記述的知識を基にして多面的、総合的に考えたことを根拠に事実判断し、説明的知識を獲得できたかを見取る問題である。問2は、多面的、総

合的に考えたことを根拠に価値判断を行い、規範的知識を獲得できたかを見取る問題である。プレテスト・ポストテストの評価は、次ページの表3に示す判断基準によって判断し検証する。評点「2」以上をおおむねできたと評価する。なお、問2では、児童の実態を詳細に把握するため、評点「1」を細分化する。

社会科テスト
5年1組 番 氏名

**呉市豊市民センターの香川さんの話**




みなさんは、「大長レモン」を知っていますか。「大長レモン」は、呉市豊町周辺で作られるレモンのことです。暖かい気候と傾斜を利用して育てられた「大長レモン」は、さわやかな香りとすっきりとした味が特徴です。

呉市豊町のレモン農家の方は、いつ、どんな農薬をどのくらい使うかというルールである「防除暦」を作って、みんなで守り、手作業で害虫や雑草を取り除いています。そのため「大長レモン」は、農薬を最低限しか使わないのでとても安全です。

美味しくて安全な呉市豊町の「大長レモン」をもっと全国の人に食べてもらいたいと考えています。

レモンの種類	個数
大長レモン	2個
大長レモン	198円
輸入レモン	100円



資料1 大長レモンと輸入レモンの販売価格の比較（平成24年 JAゆたか調べ）

**大長レモン**

問1 なぜ、呉市豊町周辺では、手間のかかる低農薬でレモンづくりをするのでしょうか。  
香川さんの話と資料を基に、あなたが考えた理由を書きなさい。

図4 ポストテスト問1

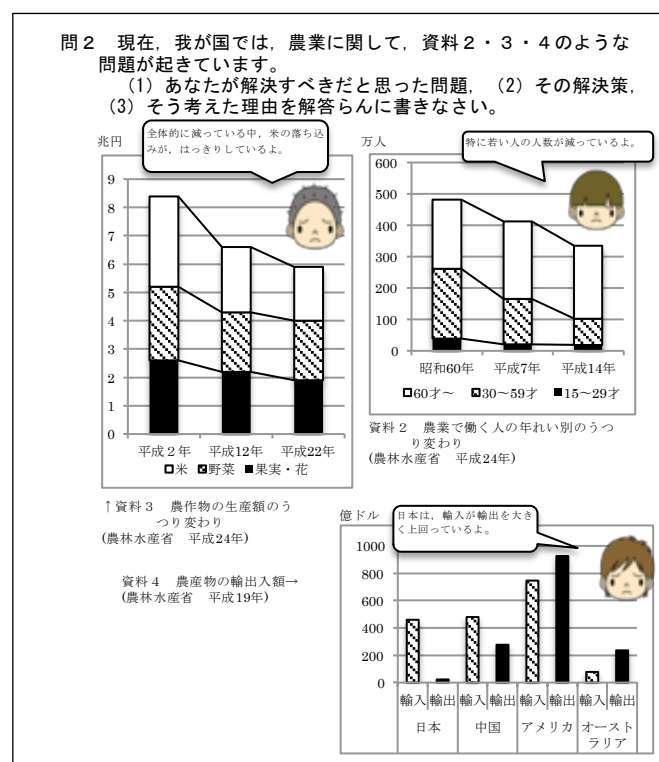


図5 ポストテスト問2

表3 プレテスト・ポストテストの判断基準

問題	判断	評点	判断基準
1	事実判断	3	複数の資料を基に多面的、総合的に考え、理由付けをしながら判断し、生産者は、生産物に付加価値を付けることで、利益を高める工夫をしているという知識を獲得している。
		2	複数の資料を基に多面的、総合的に考え、判断し、生産者は、生産物に付加価値を付けることで、利益を高める工夫をしているという知識を獲得している。
		1	生産者は、生産物に付加価値を付けることで、利益を高める工夫をしているという知識を獲得していない。
2	価値判断	3	問題の解決につながると考えられる具体的な解決策が複数書けている。解決策の理由を多面的、総合的に考えている。
		2	問題の解決につながると考えられる具体的な解決策が一つ書けている。解決策の理由を多面的、総合的に考えている。
		1	a 問題の解決につながると考えられる具体的な解決策が一つ書けている。解決策の理由を多面的、総合的に考えていない。
			b 問題の解決につながると考えられる具体的な解決策が書けない。また、解決策の理由が読み取れない。

## 4 アンケートについて

アンケートの内容は次のとおりである。アンケートは、4段階評定尺度法とし、事後のみ実施する。

トウールミンモデルを使うと考えた理由を分かりやすく書くことができた。

アンケートの質問項目

## IV 社会的事象を公正に判断する力を高める社会科授業の実際

### 1 研究授業の内容

- 期 間 平成24年12月10日～平成24年12月20日
- 対 象 所属校第5学年(1学級28人)
- 単元名 工業の今と未来
- 目 標

我が国の工業生産の現状を統計や写真等の資料から調べることを通して、我が国の工業生産の特色や貿易の特色について理解するとともに、工業生産の果たす役割について考える。

### 2 研究授業の指導計画

単元の構成を次ページの表4に表す。

## V 研究授業の考察

### 1 社会的事象を公正に判断する力を高めることができたか

(1) 多面的、総合的に考えたことを根拠に事実判断し、知識を獲得することができたか

事実判断について、プレテスト・ポストテストから分析する。プレテストでは、豊島のタチウオが一本釣りされている理由を、ポストテストでは、豊町の大長レモンが低農薬で栽培されている理由について記述させた。問1のプレテスト・ポストテストの結果を表5に示す。

プレテストでは、評点「2」以上の児童が7人であったが、ポストテストでは24人に増加した。中でも、評点「3」の児童が、プレテストでは1人であったが、ポストテストでは10人に増加した。反対に評点「1」の児童が、プレテストでは20人であったが、ポストテストでは3人に減少した。

記述内容から分析すると、プレテストでは、資料から記述的知識を記述するだけに留まった評点「1」の記述が最も多かった。しかし、ポストテストでは、資料から「低農薬でつくると安全。」「大長レモンは輸入レモンより高い。」という複数の記述的知識を読み取った上で、安全面、価格面から考えて事実

表5 問1のプレテスト・ポストテストのクロス集計結果

プレ	ポスト	3	2	1	計(人)
3		1			1
2		1	5		6
1		8	9	3	20
計(人)		10	14	3	27

表4 単元の構成

時	判断	学習内容	主発問	獲得させたい主な知識 (◎ツールミンモデルの活用によって獲得させたい知識)
1	事実判断	身の回りの工業製品について知る。	◎身の回りの工業製品を探して、仲間分けをしよう。	・日本の工業生産額は世界第3位である。 ・工業の種類は、機械・化学・金属・食品・繊維・その他に分けられる。 ・身の回りには様々な工業製品がある。
		学習課題 日本の工業には、どのような特色があるのだろうか。		
2		工業のさかんな地域の条件について考える。	◎工業が盛んな地域は、どのような場所にできるのだろうか。	・工業地域が多く集まる場所を太平洋ベルトという。 ・工業が盛んな地域は、大きな道路や空港の近くにある。 ・工業が盛んな地域は、大都市やその近郊にある。 ◎工業が盛んな地域は、輸送に便利な所や人口の多い所にある。
3		日本の貿易の特色について考える。	◎なぜ、加工貿易をするのだろうか。	・平成22年度の輸入総額は、約60兆円である。 ・平成22年度の輸出総額は、約67兆円である。 ・平成22年度の輸入品の上位は、原油、液化ガスである。 ・平成22年度の輸出品の上位は、自動車、電子部品、鉄鋼である。 ◎日本の貿易では、工業原料を輸入し、それらを加工した工業製品を輸出して、利益を得ている。
4		日本の工場の特徴について考える。	◎なぜ、日本の中小工場に世界から注文がきているのだろうか。	・日本の工場のほとんどは、中小工場である。 ・中小工場には、世界から注文を受けている工場がある。 ・「刺しても痛くない注射針」が小工場で作られている。 ◎日本の工場は、中小工場の高い技術に支えられている。
5		海外生産が増えている理由について考える。	◎なぜ海外生産が増えているのだろうか。	・海外で作られた日本の工業製品が逆輸入されている。 ・日本人の賃金は比較的高い。 ・海外で生産すると原料や製品の輸送代が安くなることがある。 ◎海外生産によって、安い価格で製品を提供することができる。
6	価値判断	工業製品と生活の関わりについて考える。	◎工業製品の発達によってわれわれの生活はよくなったのだろうか。	・工業製品の発達によって日本人のくらしは便利になった。 ・工業製品の発達によって、環境や人間関係に好ましくない影響を与えている場合もある。 ◎工業製品は、生活を便利にした反面、様々な問題も作り出している。
		学習課題 これからの工業製品は何を目指せばよいのか。自分なりに工業製品を考えよう。		
7	価値判断	これからの工業製品について考える。	◎これからの工業製品は、どのようなものをつくるべきだろうか。	◎日本の高い技術を大切にしながら、環境、未来を考え、人の心を明るくするような工業製品をつくるべきである。

判断し、「低農薬でつくられたレモンは安全なので、高くても売れる。」といった説明的知識、概念的知識を記述した評点「2」の記述が最も多かった。これは、ツールミンモデルを活用した学習において、複数のデータから判断した方が、より根拠が明らかになることを実感したからだと考える。

問1の結果から、複数の記述的知識を根拠に事実判断し、説明的知識、概念的知識を獲得している児童が多くなっていることが分かる。

これらのことから、児童は、多面的、総合的に考えたことを根拠に事実判断し、知識を獲得する力が高まったといえる。

一方で、プレテスト・ポストテストともに評点「1」だった児童は、解決策の理由を資料の記述からそのまま引用し、「マニキュアに使うから。」等、問題文の意味をよく理解せずに記述していた。このことは、資料から情報を十分に読み取っていないことが原因と考える。

## (2) 事実判断を基に多面的、総合的に考え、根拠を明らかにして価値判断し、知識を獲得することができたか

プレテスト・ポストテストから分析する。問2は、  
(1) 資料から問題を設定 (2) 設定した問題の解決策の提案 (3) 解決策を考え理由から構成された3問を判断基準に基づき総合的に判断する。プレテストとポストテストの結果について表6に表す。

表6 問2のプレテストとポストテストのクロス集計結果

プレ \ ポスト	3	2	1 a	1 b	計 (人)
3	3				3
2	1				1
1 a	7	1	1		9
1 b	8	1	2	3	14
計 (人)	19	2	3	3	27

プレテストでは、評点「2」以上の児童が4人であったが、ポストテストでは21人に増加した。中でも、評点「3」の児童が、プレテストでは3人だったが、ポストテストでは19人に増加した。また、評点「1」の児童は、プレテストでは23人であったが、ポストテストでは6人に減少した。

問2について、児童が具体的にどのように変容したか、評点「1 a」から評点「3」に変容した代表的な児童aを取り上げて述べる。記述内容は、次ページの表7に示す。

児童aは、プレテスト・ポストテストとも働く人が減少していることを問題として取り上げた。プレテストでは、問題の解決策と理由の記述について、一つの解決策に一つの理由を記述するだけに留まっていた。しかし、ポストテストでは、解決策を複数記述し、解決策の理由を働く人の立場や費用面という複数の視点から、効果の大小を考えて記述した。これは、事実判断の力が高まり、資料から読み取ったことを数多くデータに記述し、それらを関連付けて多面的に考えられるようになったからだと考える。



表7 児童aの問2の記述内容

	プレテスト	ポストテスト
(1)	漁業をする人が減っている問題。	農業をする人が減っている問題。
(2)	若い人に漁業の楽しさを知らせる。	チラシで若い人に呼びかける活動。農業を体験させる。
(3)	楽しい仕事だと思ったら、興味をもってもらえるから。	よい点を知らなければ、働こうとは思わない。広告と体験では体験の方がよさを実感できる。言葉より体験の方がいろいろなよさが伝わりやすいからだ。お金もかからない。

このことから、児童aは、産業の問題について、複数の面から考えたことを根拠に価値判断し、規範的知識を獲得していることが分かる。

問2の結果から、社会的事象に対し多面的、総合的に考えたことを根拠に価値判断し、知識を獲得する力が高まったといえる。

一方で、ポストテストの評点が「1」であった児童が6人いた。「1a」の児童が3人、「1b」の児童が3人である。「1a」の児童は、理由を多面的に考えていなかった。自らの根拠を多面的に考えるよう継続して指導していくことが必要だと考える。評点「1b」の児童は、資料を読み取り、農業の問題を明らかにすることができなかった。3人のうち2人が無回答で、1人が、解決策に「農業は人数がいないとできない。」と解決策ではない記述をしたことから、資料を基に情報の意図を読み取れなかったことが原因だと考える。

## 2 ツールミンモデルを活用した授業構成は、社会的事象を公正に判断する力を高める上で有効であったか

### (1) アンケートによる分析

社会的事象を公正に判断する力を高める上で、ツールミンモデルが有効であったかを検証するために、研究授業後にアンケートを実施した。アンケート調査の結果を図6に示す。

ツールミンモデルを使うと、25人(93%)の児童が、考えた理由を分かりやすく書くことが「でき

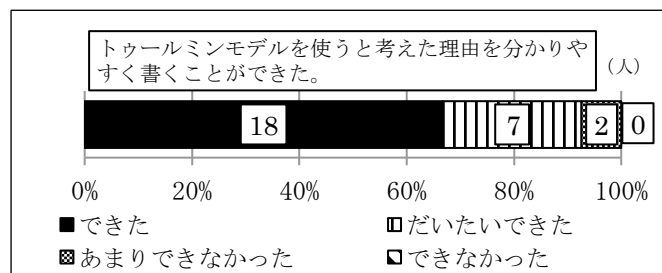


図6 アンケート結果

た」「だいたいできた」と肯定的な回答をしている。

自由記述では、「自分の意見の理由を見直すことができるようになった。」「主張だけでなく、理由を意識するようになった。」「理由についてあれこれ考えるようになった。」といった回答が見られた。

これらのことから、ツールミンモデルを使うことで、自分の考えを深めることや自分の考えの根拠を分かりやすく整理できるようになったと実感をしていることが分かる。

### (2) ツールミンモデルによる分析

前述した児童aのツールミンモデルについて分析する。児童aの第4時のツールミンモデルを図7に示し、変容について述べる。

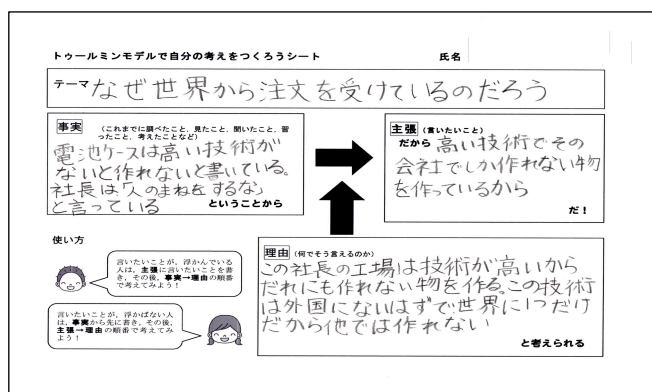


図7 児童aの第4時のツールミンモデル

児童aは、第2時の学習で、工業が盛んな地域の条件について考えた際、1次判断では、ツールミンモデルに「海に近い所」等、調べたことで読み取った記述的知識をそのまま条件と判断し、主張に記入した。データ、理由付けは記入できなかった。この後、交流によって得た「空港に近い所」という記述的知識が根拠になると考え、再びツールミンモデルで根拠を整理した。2次判断の結果、「海に近い所」「空港に近い所」という複数の面から考えたことから「工業が盛んな地域は、製品をいろいろ運びやすい所。」という説明的知識を獲得した。

第4時の学習では、我が国の中小工場が世界から注文を受けている理由について考えた。児童aは、1次判断の時から、調べたことで獲得した複数の記述的知識をツールミンモデルのデータに書き入れ、根拠を整理しながら判断し、「我が国の中小工場は、高い技術でそこでしか作れない物を作っている。」という説明的知識を獲得した。第2時とは違い、第4時では最初から複数の面から考えたことを根拠に判断をしている。

このことから、児童 a は、トゥールミンモデルに根拠を整理することを繰り返すことで、複数の面から考えたことを根拠に事実判断することが自らの力でできるようになったことが分かる。

また、この児童は、第7時でこれからの工業製品について価値判断した際に、「日本の高い工業技術」「ゲーム機の広まりによって目が悪くなっている人がある。」等のこれまでに獲得した知識や資料から読み取ったことをデータに記述し、「ゲーム機の広まりによってくらしは、楽しくなったが、健康に悪い影響が出ている。日本の高い技術があれば、全身を使って操作するゲームや2時間を超えると自動的に電源が切れるゲームなど、体に良いゲームがつくれ、楽しく健康的なくらしになるから。」と理由付けをしながら、「今後は、体にやさしいゲーム機を開発すべき。」という主張を導き出していた。

このことから、児童 a は、事実判断によって獲得した知識を活用し、「消費者の立場に立った工業製品を開発すべき。」という規範的知識を獲得することができたことが分かる。

以上、(1)(2)のことから、トゥールミンモデルを活用した授業構成は、自分の考えの根拠を分かりやすく整理できるため、多面的、総合的に考えたことを根拠に社会的事象を公正に判断する力を高めるのに有効であったといえる。

## VI 研究のまとめ

### 1 研究の成果

トゥールミンモデルを活用した授業構成モデルによって、児童は、社会的事象を多面的、総合的に考えたことを根拠に判断し、知識を獲得することができた。このことから、小学校社会科の学習において、トゥールミンモデルを活用した授業構成を行えば、社会的事象を公正に判断する力を高めることができることが明らかになった。

### 2 今後の課題

○ プレテスト・ポストテストで、問1、問2ともに評点「1」の児童が3人いたことが課題である。これらの児童に共通しているのは、根拠を明らかにするために必要な情報を資料から読み取ることができなかったことである。今後は、資料から読み取る内容を焦点化して読み取らせたり、資料の読み取り方を具体的に指導したりする等の指導方法の工夫・改善を図っていきたい。

○ トゥールミンモデルを活用した授業構成モデルを実践したのは、第5学年の1単位だけである。そのため、他学年、他単位においても有効であるかは、検証できていない。今後は、この学習モデルが、他学年や他単位でも活用できるかを検証していきたい。

### 【注】

- (1) 国立教育政策研究所（平成20年）：『特定の課題に関する調査（社会）調査結果（小学校・中学校）』 pp. 57-67に詳しい。
- (2) 北俊夫（2011）：『“知識の構造図”－“何が本質か”が見えてくる教材研究のヒント－』明治図書 p. 75
- (3) 岩田一彦（2001）：『社会科固有の授業理論・30の提言』明治図書 pp. 32-33に詳しい。
- (4) 尾原康光（1991）：「社会科授業における価値判断の指導について」『社会科研究』第39号全国社会科教育学会 p. 70
- (5) 吉村政宣（1985）：「価値論に基づく意思決定能力の研究」『社会科研究』第33号日本社会科教育研究会 p. 78
- (6) 岩田一彦（1991）：『小学校社会科の授業設計』東京書籍 pp. 38-43に詳しい。
- (7) 岩田一彦（1991）：前掲書 pp. 43-44に詳しい。
- (8) 朝倉淳（1996）：「社会的判断力を育成する小学校社会科の授業構成－『私たちの生活とごみ』を事例として－」『社会科研究』第45号全国社会科教育学会 p. 53に詳しい。
- (9) 桑原敏典（2009）：『社会科の指導計画作成と授業づくり』 pp. 22-23
- (10) 足立幸男（1984）：『議論の論理』木鐸社 p. 100を基に稿者が作成。
- (11) 足立幸男（1984）：前掲書 pp. 94-103に詳しい。
- (12) 田本嘉昭（平成19年）：「思考・判断する力を高める社会科学習の指導の工夫－トゥールミンモデルを取り入れた討論活動を通して－」 <http://www.saga-ed.jp/shien/ronbun/h19/kitashigeyasu-tamoto.pdf> を参照されたい。

### 【引用文献】

- 1) 文部科学省（平成20年）：『小学校学習指導要領解説社会編』東洋館出版社 p. 105
- 2) 森分孝治（1984）：『現代社会科授業理論』明治図書 p. 78
- 3) 尾原康光（1991）：「社会科授業における価値判断の指導について」『社会科研究』第39号全国社会科教育学会 p. 70
- 4) 岩田一彦（2001）：『社会科固有の授業理論・30の提言』明治図書 p. 62
- 5) 桑原敏典（2009）：『社会科の指導計画作成と授業づくり』明治図書 p. 23